
双璧の謳歌

黒崎 由貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双壁の謳歌

【Nコード】

N4666B

【作者名】

黒崎 由貴

【あらすじ】

どこにでもいる普通の中学生の山崎明は十四才の誕生日に交通事故にあい、そのせいでかはわからないが前世と入れ替わってしまう。そして、前世が住んでいる時代（江戸時代）には親友そっくりな人物がいた。時代の渦に巻き込まれながら明は前世のふりをして生活を送る。一方前世は記憶喪失ということとなり、全く違う時代で中学生としての生活を余儀なくされる

序（前書き）

初めてちゃんと書いた小説なのでかなり下手っぴです。あと、これから誤字脱字がある可能性大です。あったら教えて下さい。

序

急いで行かなければ遅れてしまう。

早く行かなければ…。

信号が青に変わり、急いで横断歩道を渡ろうとした。

すると、何故か横から車が突っ込んでくる。

ドライバーのびっくりした顔が一瞬見えた気がする。よくはわからなかったけれど。

だって次の瞬間には…

キキイイイイイ

ガンッ。

何故か痛みは感じなかった。

私は死ぬのだろうか。そうしたら約束を破ってしまうな。

紫乃、真ごめんな。待ち合わせ場所に行けそうもない。

ハルもごめん。折角頑張ってバンド活動してるのに、見に行けなくて…

やばいな。体から力が抜けていつて、意識が霞んでいく。

みんな、ごめんな…

壺

「……き…明…明、どうしたの？」

どこからか声がする。

「明？朝だよ！起きないとご飯なしだよ？」

ゆさゆさと体を揺すられている。

あと、この声。どこかで聞いた事がある。

えっと、この声は…

「し、紫乃？」

ゆっくりと体を起こすと、そこには私の友人み水野紫乃がいた。

ただ、いつもの服ではなく、時代劇やドラマで見るような着物を着ている。

今劇をやっていたんだっけ？

ふと気が付くと私も寝間着なのか、薄い着物のような服を着ている。

いつの間に着替えたんだ？

「もう、遅いよ。また何か書き物でもしてたの？」

立ち上がろうとしていた私の手を紫乃は引つ張る。

書き物？なんの事だ？

立ってみると、変なところはそれだけではない事に気付く。

私は元々あまり身長が高いほうではなく、紫乃とも大体同じぐらいだ。

なのに、今の私は紫乃を見下ろしているのだ。
髪だっけかなり長くなっているし、なんで…

「明、顔色悪いけど大丈夫？」

紫乃が私を見上げて聞いてくる。

「い、いや大丈夫だ」

こないいつもと違う事だらけで大丈夫なわけがない。

でもとりあえずそう言うしかない。

「ん？いつもなら『大丈夫です紫乃様』って言うんだけどなあ」

え？紫乃様？

それに敬語？

一体ここは…

まあとりあえず

「いえ、

大丈夫です紫乃様。少し夢見が悪くて混乱してただけですので」
微笑みながら言つと紫乃も笑つた。

「そつか。じゃあ着替えたら来てね」

そう言つと紫乃は襖を閉めて部屋を去つた。

きく式

……。

とりあえず着替えてたほうがいいか。

着替えは… あった。

枕のすぐ近くにきれいに畳まれておいてある。

剣道の胴着と同じ感じなので楽に着れるな。

ところが、私は着替えている途中で絶句した。

何か違和感があるとはずっと思っていた。

しかしこんな… こんな… 男になっているなんて…!!

私は悪い夢でも見ているのだろうか。もし夢なら覚めてくれ。

ぎゅっと頬をつねるとじーんと痛い。

夢じゃない。

落ち着け、落ち着くんだ。

まず整理を試みよう。

1 私は事故にあった。

2 何故か見慣れないところにいる。

3 紫乃がいる。

4 私は紫乃に敬語で様付けしているらしい

5 私は男である

…もしかしてトリップをして、誰かと入れ替わってしまったのかも
しれない。

でもそんな事小説や漫画じゃあるまいし…

でも、それなら有り得ない話だが、私が男になっているのも紫乃へ
の敬語も説明が付く。

情報が少ないからまだなんとも言えないが。

そうだ着替えて行かなければならないんだった。

ふと思い出して急いで着替える。

布団と着ていた寝間着を畳んで押し入れにしまつと私は部屋を出た。

…来いと言われてたもののどこに行けばいいんだ？

「明遅いね」

少し遠いが、確かに紫乃の声がした。

私は声のした部屋へと向かう。

ここか？

部屋の前に立つと何人かの話し声がする。

多分ここだな。

「失礼します」

一声かけて襖を開ける。

「遅いぞ、明」

これもどこかで聞いた事のある声。

……真？

参る

紫乃の横には私の友人、久保田真にそっくりな男がいた。

「すいません真様」

とりあえず様付けで謝り、頭を下げる。

紫乃に続き真までいるなんて…一体どうなっているんだ。

「いーじゃん真。明はいつも早起きだし、たまにはこういう日もあるよ」

「まあ、紫乃がそう言うなら」

紫乃の一言で真は渋々ながら静かになる。

二人は恋人同士か何か？

「ほら、明も立ってないで座りなよ」

紫乃は自分の横の座布団をぱんぱんと叩く。

食事の席ではしたない。

だからと言って下手に発言もできないので静かに紫乃の横に座る。

すると、紫乃の前にいた男が口を開く。

「皆も知っているが、我が友、久保田直の息子。真君と紫乃の婚約が正式に決まり、昨夜は真君に家に泊まってもらった。まあこれは私達親が決めた事だが、二人は幼馴染みという事もあるし、明るい家庭を作つて欲しい。さて、話しはここまでにして朝食にしよう」

みんなで

「いただきます」

と言い朝食を食べ始める。

やはり二人は婚約関係か。それも幼馴染み。

親が仲がいいからなんてよくある話だ。

にしても…なんだこの朝食の量は。

裕福な家だな。貴族かなんかか？

朝食をあまり食べない私にとってはかなり無理な量だ。

仕方ない。

目が覚めてから妥協ばかりしてる気がするが、とにかく私は無理矢理朝食を食べる。

が、やはり半分程は限界のために残してしまう結果となった。

「うちそうさまでした」

食器を片付けようと立ち上がろうとすると、それを紫乃の手が征す。

「片付けなくていいよ。そんなの侍女がやるから。それより休んだほうがいいよ？ 具合悪そうだし」

「すみません。お言葉に甘えさせていただきます。失礼します」

私は具合が悪そうに立ち上がり、部屋を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4666b/>

双壁の謳歌

2010年12月11日02時45分発行